

令和 2 年 5 月 23 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02439

研究課題名(和文) 村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承 - 葬儀変化にみる地域差の存在とその意味 -

研究課題名(英文) The Disruption of Mutual Aid in Village Society and the Support and Transmission of Folk Customs: The Meaning of Regional Differences in the Light of Changes in Funeral Rites

研究代表者

関沢 まゆみ (SEKIZAWA, MAYUMI)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：00311134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,600,000円

研究成果の概要(和文)：葬儀の変化とその地域社会の対応は多様である。土葬から火葬への変化による九州南西部の大型納骨堂建設、近畿農村の両墓制の消滅、また自宅葬からホール葬への変化による、北関東農村にみる組のつきあいの消滅、秋田県下の霊送り習俗の消滅などがある。一方、葬儀の変化は起こっても村落の伝統的な民俗行事のうち、花田植などの指定無形文化財、盆行事、沖縄の清明祭や十六日祭など先祖祭祀に関する民俗は、比較的強い伝承力を維持している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

葬儀の変化の画期は、組の相互扶助による葬儀から葬儀社委託へ(1990年前後から)、自宅葬からホール葬へ(2000年以降)という2つが大きかった。葬儀における相互扶助の消滅が人びとの生活にどのような影響を与えているのか、地域の伝統的な民俗行事の継承の観点から調査した結果、葬儀変化への対応の地域差、そして葬儀は合理化されても死者や先祖の靈魂祭祀の行事は比較的強い伝承力を有していることが指摘できた。

研究成果の概要(英文)：The regional differences in the light of changes in funeral rites are diversifying. Regional societies have been responding diversely to the changes in funeral rites. The shift from in-ground burial to cremation has resulted in large columbarium built in the southwest of Kyushu and the disappearance of double-grave system in Kinki region. Mutual aid systems in local society have been disintegrating and the folk custom of tamaokuri in Akita prefecture, in which the soul of the departed were guided to its grave, has been lost because of the shift from private homes to funeral-halls. On the other hand, UNESCO Intangible Cultural Heritages of Humanity, such as Hanataue in Kita-Hiroshima-cho, and the tradition of veneration of the dead (ex. Bon festival, Seimei-sai and Jyurokunichi-sai in Okinawa) have been strongly transmitted in spite of the changes in funeral rites.

研究分野：民俗学

キーワード：葬儀の変化 地域社会 相互扶助の喪失 組のつきあい 葬儀社 民俗行事 先祖祭祀 伝承力

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、葬儀の変化で注目されたのは、1960年代までの土葬から公営火葬場の利用へ、2000年以降の農村部における葬祭場の建設にともなう自宅葬からホール葬へという「場」の変化が、近隣による葬儀の手伝いを必要としなくなり、地域での葬儀から喪家と葬儀社による葬儀へという大きな変化を引き起こしていたことであった(関沢編『国立歴史民俗博物館研究報告』191(特集号「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究 - 『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡と中心に - 」2015年、同編『民俗学が読み解く葬墓の変化』朝倉書店 2017年など)。その背景には、高度経済成長期を経て農村部でも給与所得による勤め人生活、生活の個人化が浸透したことが反映されていたといえる。とくに近年では、農村部においては、他人に迷惑をかけないようにという喪家の意思で、地域の人の手伝いはもちろん香典や甲問も辞退してごく近い親族だけで行なう家族葬が流行してきている。家族葬の選択は跡取りが同居していても、また経済的に余裕がある場合でもその選択がなされるようになっており、すなわち生活の個人化を強く反映しているものと観察される。また、昭和30年代まで行なわれてきた野辺送り等の葬送の習俗は、近世にかたちづくられたものが継続してきたとされている。そして、近隣の相互扶助も近世村請制以来の伝統であった(新谷尚紀『葬式は誰がするのか』吉川弘文館 2015年)。家族葬という急速な葬儀の縮小化は、その17世紀半ば以降200年余り伝承されてきた葬送習俗の解体を示しているのである。このような、生活変化に伴う葬儀における人々の結集力の弛緩が地域の伝統行事の伝承にどのような影響を与えているのかについての民俗学からの研究が必要な状況であった。

2. 研究の目的

高度経済成長期以降の経済や社会の大きな変化の延長線上で2000年以降、地域社会の相互扶助のあり方に大きな動揺がみられる。とくに葬儀の自宅葬からホール葬へ、家族葬へ、そして香典の辞退などの変化(葬儀の縮小化)にそれが顕著である。しかし、生業や伝統行事も含めた実際の民俗学の調査現場では、そのような社会関係の変化にも対応の地域差を見出すことができる。村の相互扶助の代表的な場が葬儀であったが、それが揺らいでいる現状を把握するとともに、それが村の伝統的な民俗行事の伝承に何らかの影響を与えているのか否か、その点を各地の事例より分析していく。本研究では、ホール葬・家族葬と地域社会の実態、葬式の相互扶助という社会関係の変化と地域の伝統行事などにみられる文化的結集力についての調査から、生活変化と伝承維持力との関係を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)1990年代まで自宅葬が行なわれていた地域の、ホール葬への変化と家族葬の実態及び初盆行事についての追跡調査及び地域ごとの産業や村落や主な伝統行事についての調査を行ない、全国的な傾向と地域差の実態の把握を行なう。(2)近畿農村の宮座、芸北地方の花田植、沖縄県の清明祭などが伝承され、比較的家族葬を抑制する力がみられる地域について民俗誌的調査を実施し、地域の歴史と人びとの結集力との関係性について多面的に分析を行なう。

4. 研究成果

(1)先行研究の整理と成果の公開 昭和30年代以降、集落での溝浚えや道普請などの共同労働や、結婚、出産における地域の人びとの相互扶助など、地域社会における共同慣行が日本各地で次第に消滅していった。そのなかで、比較的遅くまで残っていたのが葬儀における相互扶助であった。しかしそれも、1990年代から2000年以降、地域の人びとの手を離れて葬儀社職員によるものとなり、まもなく葬儀の場所も自宅から葬祭ホールへと変化した。このような葬儀の業者依存へという変化、地域社会での土葬から公営火葬場利用の火葬へという遺体処理の担い手と方式の変化に、各地でどのような対応がみられるのか。民俗学の取り組みとしては、1960年代の葬儀と1990年代の葬儀とその間の変遷を追跡した国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成』(1998年・1999年)による情報収集が比較的早いものであった。それから20年以上が経過する現在、葬儀の変化と地域社会の現状とがどのように展開しているのか。それについて、研究期間内に、九州、近畿、関東、東北と各地で調査を試みてきた葬儀と墓の変化と地域社会の動向、沖縄の葬儀の変化と門中の洗骨習俗及び清明祭・十六日祭の現在、講中の結束が固くその相互扶助なしの葬儀は考えられないとまでいわれていた広島県西北部の安芸門徒の集落の現状、などの調査研究を進めてきた。

『科研基盤 B 村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承 - 葬儀変化にみる地域差の存在とその意味 - 』2017年度中間報告(2018年、85頁)、『同』2018年度中間報告(2019年、73頁)を作成し、2019年度には、現代民俗学会第49回研究会(2020年3月7日 於：お茶の水女子大学)において、「葬儀の変化と地域社会」をテーマにグループ発表を行なうこととした。現地調査に基づく研究発表を行ない、あらためて葬儀と地域社会の現在を、具体的な事例をもとに民俗学的な視点から読み解こうというものであった。研究会は新型コロナウイルスの流行により

急遽中止となってしまったが、その内容については、本科研の研究成果の一部として『国立歴史民俗博物館研究報告』に小特集として投稿する計画で現在原稿を執筆中である。

(2) 葬儀の変化と地域社会 葬儀の変化が、人びとの生活にどのように影響を与えているか、葬儀という現象面の変化だけでなく、その地域社会の変化にも注目した場合、次の3点について変化の実態として指摘することができる。土葬から火葬への変化に伴う地域の対応として、大型納骨堂建設(九州南西部) 石塔墓地造成によるサンマイ(埋葬墓地)の利用の変化(近畿農村)である。火葬によってその焼骨の納骨施設が必要になったため、伝統的な墓をめぐる習俗を変化させ、近畿農村においては火葬の普及が人々の死穢忌避観念を希薄化させていく変化が2010年前後におこっている。自宅葬からホール葬への変化に伴う地域の対応として、組やソーレン親類と呼ばれる近隣のつきあいの消滅(栃木県、滋賀県ほか)、霊送り習俗の消滅(秋田県)などが観察される。これは、葬儀の長い歴史のなかでも、近隣の相互扶助によって執り行なわれてきた葬儀の終焉を意味する大きな変化である。とくに、近畿農村のソーレン親類は、村落のなかに親戚が少ない場合、葬式の時だけ「親類になってもらって血縁が行なう土葬の役を担ってもらおう」というものである。これは、もともと葬儀は家族・親族など血縁によるものであったのが、近世以降の相互扶助の慣行の推進により、地縁によるものへと変化したその歴史を民俗のなかに伝えてきていたものであったが(新谷『葬儀は誰がするのか』吉川弘文館 2015年)それがいま消滅しているのである。葬儀の縮小化・家族葬の普及によりそれとは対照的な北関東など農村部における初盆行事の活発化である。2000年以降、農村部にも葬祭ホールが建設されるようになると、最初は、跡取り息子が東京などに出ているので葬儀の手伝いをしてもらってもお返しができないからということで、「組の人に遠慮して」ホール葬を選択する事例が多かったが、すぐにその簡単さ、便利さが評判となって、地域社会にホール葬が急速に普及していった。そして、葬儀の縮小化が進み、ホールでの家族葬がブームになっていった。家族葬では、喪主が香典、通夜のお見舞い、甲問などを一切遠慮することを組内に伝えるが、これまでの義理(香典のやり取り)を返す場がないという戸惑いの声が聞かれていた。そのようななかで、人々は初盆にお見舞いに行くことをそれまでよりもいっそう重視している傾向が認められる。もともと葬儀にきた人の約3分の2が初盆にお見舞いに訪れるものであったが、葬儀に参列できなかった人が大勢初盆に訪れるようになってきている。この初盆の習俗については盛んな地域とそうでない地域があるが、初盆を重視している地域では、葬儀で死者を送れなかった分、初盆が靈魂送りの機会としての新たな意味をもつようになってきているように観察される。また、伝統的に日本における葬儀は、遺骸送りと靈魂送りとの2つがあったが、遺骸送りの習俗(ホール葬への変化や火葬への変化)に比べて、靈魂送りの習俗や観念は簡単には省略化されにくいものだとはいえる。

(3) 沖縄の葬儀の変化と洗骨習俗及び清明祭、十六日祭の伝承実態火葬後の洗骨 現在、沖縄県南部、糸満市字糸満に約40ある門中のうち、およそ半分がジョーアキーと呼ばれる洗骨・改葬を行なっていると報告されているが、2018年10月28日に、その一つで門中の結束力が強い「上米次腹(ウィーグムチバラ)・座久仁腹(ザグジンバラ)」と呼ばれる、宇那志門中、保才門中、玉城門中、座久仁門中の4つの門中(約3000人)が共同で行なう門開き(ジョーアキー)と呼ばれる洗骨・改葬儀礼に立ち会うことができた。その内容は、研究協力者である津和一秋氏(筑波大学大学院生)の「糸満市における火葬後の洗骨改葬 - 上米次腹・座久仁腹の場合 -」(『科研基盤 B 村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承 - 葬儀変化にみる地域差の存在とその意味 -』2018年度中間報告 2019年、p33-53)に詳細に報告されている。ジョーアキーは、年に一度、門中で共有しているユーチー墓(シルヒラシ墓)を開けて、死後一定期間経過した遺骨の洗骨を行ない、あらためてトーシー墓と呼ばれる第二次葬の墓に納める一日がかりの行事である。糸満市域では、戦後、風葬から、公営火葬場の利用による火葬へと変化した。それでも、今なお、火葬骨をユーチー墓にいったん仮置きし、1年後、ジョーアキーの日に洗骨を行ない(骨壺から焼骨を出して、酒で清めている)そのまま傘をさしかけて日にあたらないようにして第二次葬のトーシー墓まで移動し、奥壁面のイキ(池)と呼ばれる特別な場所にウンチケー(合葬)といって骨を納めているのである。しかし、近年、「タビの人」(八重山、宮古、本土あるいは外国に居住している者)で、ユーチー墓に親の骨壺を納めたきり、ジョーアキーに帰ってこない者もみられるようになったという。実際、2018年の場合もタビの人のウンチケーは行なわれなかった。現地のM氏(昭和39年 1964 生まれ)によると、昭和13年(1938)4月にシルヒラシを1つ増築して4つにした後、平成14年(2002年)に、それまでシルヒラシのために珊瑚を敷き詰めたうえに棺桶を安置するだけだったユーチー墓内部を、火葬後の骨壺を置くように柵式にしたという。やはり火葬が大きく習俗を変えたという。宮良氏は、残されている骨壺をみて、「トーシー墓に入れることを知らない人を探すことにした」という。柵に3年以上も置きっぱなしにされることは寂しいことだといひ、大学生の息子に「お父さんのことあそこに置きっぱなしにしないで」と言っていた。洗骨を経て、門中が皆入るトーシー墓に納められてこそはじめて葬送儀礼が完了するのだという意識が強いといえる。また、トーシー墓で皆と一緒にいるという門中としての強い一体感が、火葬後も洗骨儀礼を維持継承していく背景にあると考えられる。

明祭と十六日祭 沖縄の墓参や先祖祭祀の伝承には、琉球王府や士族など首里の上層社会から広まっていった4月5日頃の清明祭と、八重山諸島など周辺の島嶼部においても伝承されている旧正月16日に行なわれる十六日祭とがある(武井基晃「南西諸島における葬送・洗骨・墓参の変化」関沢まゆみ編『民俗学が読み解く葬儀と墓の変化』朝倉書店 2017年)。そこで2019

年4月に首里・那覇の清明祭を、2020年2月(旧暦1月16日)に石垣市白保地区、宮良地区の十六日祭の実地調査を行なった。清明祭、十六日祭ともに、一族の老若男女が参加して、一族の墓を拝み、伝統的な重箱料理などを供えて会食し、紙銭を燃やすなどが行なわれる。十六日祭ではその後、子供たちは墓前で凧揚げに興じる。那覇市においても石垣市においても、近年、自宅葬からホール葬への変化が進んでおり、葬儀において近隣の相互扶助は必要なくなってきている。そうしたなかで、清明祭、十六日祭では、若い世代も墓前に参集し、手作りの重箱料理が供えられて、墓前で共食が行なわれるなどは変わらないかたちで伝承が維持されてきているのが注目された。

以上、沖縄の糸満市の門中による墓開きの儀礼や清明祭、石垣島の十六日祭の調査からも、葬儀は業者委託やホール葬へ、風葬から火葬へと変化しても、火葬骨に対して洗骨が行なわれていること、沖縄本島の清明祭と周辺の島嶼部における十六日祭の根強い伝承などから、葬儀の変化がおこっても死者の霊魂や先祖祭祀は変化がすぐに連動しないことが確認された。

(4) 葬儀の変化と集落運営の現状

大柳生の宮座と葬儀の伝承と変化 20年余り調査を継続してきている近畿地方村落の両墓制と宮座についての2000年以降、2020年現在までの変化の動向について追跡調査を行ってきた。大柳生では、平成19、20年(2008)頃に、土葬から公営火葬場の利用へと変化が起こった。平成19年3月死亡の女性の事例では、午後、自宅葬での葬儀の後、火葬がなされ、その翌日、垣内の組の男性によってミハカ(旧来の埋葬墓地)に焼骨が埋納された。墓から帰ったら、塩を入れた盥に足を入れて清めてから家に入るなどの儀礼は行なわれた。平成25、26年(2014)頃から、葬祭ホールにおいて通夜と葬儀が行なわれるようになり、火葬後に帰宅すると、組の者には頼まず血の濃い親戚が墓穴を掘って焼骨を埋納するようになった。これに伴い、土葬の頃は野辺送りや棺を担ぐ者は行列の最後を歩き、死穢が人びとにかからないようにしていた慣習が消滅した。また、土葬した夜は雨戸をびたっとしめて、忌み籠り死霊が来ないようにしていたという家もあるが、火葬になってからは忌み籠ることはなくなった。このように葬儀の変化に伴って、死穢忌避の感覚の弛緩や希薄化が指摘できる。また、この伝承力の弛緩は、葬儀だけではなく、村落生活において重要な氏神の祭祀を行なう宮座の儀礼においても、太鼓踊りの明神様への奉納の突然の中止(2006年)などにみられる。つまり、この事例からは、葬儀の変化もおこったが、宮座行事の変化もおこったこと、それは前者が後者に影響を与えたとか誘導したという関係性で読み解くものではなく、それぞれに伝承力の弛緩が認められるということになる。ただ、その変化が2000年代半ばの平成19年(2007)、平成20年(2008)の頃を画期としていた点が注目された。

花田植を伝えている安芸門徒の村落の事例から 講中の結束が固くその相互扶助なしの葬儀は考えられないとまでいわれていた広島県西北部の安芸門徒の集落の現状からは、2008年に北広島町営の新「慈光苑」竣工とJA「虹のホール」開業などにより、講中による葬儀役割の大部分が喪失してきている。一方、この地域には「壬生の花田植(ユネスコ無形文化遺産登録)」が伝承されているが、その地域の結集力は、農事組合法人による圃場経営、退職した技術者たちによる法人参加のパン屋の運営などにも展開している。以上、奈良市大柳生町、広島県北広島町などの事例から、葬儀の変化がただちには伝承行事の変化に連動していないことが確認された。ただ、本研究期間に調査、報告された事例を比較してみると、地域社会の人びとの結集力の強い、弱い、伝承力の弛緩の程度などには地域差があり、伝承行事を守ることが人びとの紐帯の確認になるような歴史と由緒を伝えている地域社会の方が葬儀は変化しても結集力が維持されているということが指摘できる。

参考文献

- 関沢まゆみ編『国立歴史民俗博物館研究報告』191(特集号「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究 - 『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡と中心に - 」2015年)
- 関沢まゆみ編『民俗学が読み解く葬儀の変化』朝倉書店 2017年
- 新谷尚紀『葬式は誰がするのか』吉川弘文館 2015年
- 津和一秋「糸満市における火葬後の洗骨改葬 - 上米次腹・座久仁腹の場合 - 」(『科研基盤 B 村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承 - 葬儀変化にみる地域差の存在とその意味 - 』2018年度中間報告 2019年、p33-53)
- 武井基晃「南西諸島における葬送・洗骨・墓参の変化」(関沢まゆみ編『民俗学が読み解く葬儀と墓の変化』朝倉書店 2017年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 関沢まゆみ	4. 巻 85-10
2. 論文標題 日本の民俗伝承にみる死後の世界	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大法輪	6. 最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関沢まゆみ	4. 巻 118 - 4
2. 論文標題 高度経済成長と民俗学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 124 - 140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関沢まゆみ	4. 巻 207
2. 論文標題 昭和30年代のダム建設と集落移転	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 11 - 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 207
2. 論文標題 沖縄の戦後復興から高度経済成長の民俗学的考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 153 - 181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮内貴久	4. 巻 207
2. 論文標題 高度経済成長期における公営住宅の建設 - 福岡市弥永団地を中心に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 183 - 221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 32
2. 論文標題 先祖の歴史に対する子孫の関心 - 家譜の読解と元祖の位牌の新設 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較家族史研究	6. 最初と最後の頁 8 - 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 118 - 4
2. 論文標題 日本民俗学が論じた沖縄 - 1970年前後の反省の文脈を中心に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 112 - 123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 300
2. 論文標題 社会 - 眼前にある課題群 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 43 - 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷尚紀	4. 巻 118 - 4
2. 論文標題 日本民俗学と國學院大學 - 歴史と伝統に学び未来へとつなぐ -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1 - 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 関沢まゆみ
2. 発表標題 いま、老いを考える - 民俗学の視点から -
3. 学会等名 山陰民俗学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武井基晃
2. 発表標題 墓の立ち退き移転の抵抗と受容 - 土族門中が首里地区の墓を手放すことの意味 -
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	武井 基晃 (Takei Motoaki) (00566359)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	宮内 貴久 (Miyuchi Takahisa) (10327231)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授 (12611)	
研究 分 担 者	新谷 尚紀 (Shintani Takanori) (80259986)	國學院大學・文学研究科・客員教授 (32614)	